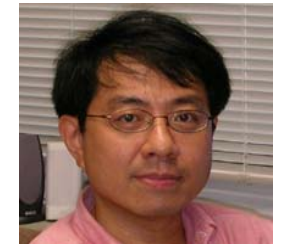


### 泉 典洋 氏



昭和62年3月 東京大学工学部  
土木工学科卒業  
平成 5年9月 米国ミネソタ大学大学院  
博士課程修了(phd)  
同年10月 東京工業大学工学部  
土木工学科助手  
平成 8年4月 東北大学工学部  
土木工学科助教授  
平成11年8月~13年9月  
タイ国アジア工科大学院  
土木工学科助教授  
平成17年4月 北海道大学大学院  
工学研究科教授

### 人と川の関わりの歴史と未来、石狩川のこれまでとこれから

(第十二回 十二月六日)  
人類は太古の昔から川とともに暮らし  
て来た。水のコントロールは灌漑農耕を  
容易にし、人類は繁栄した。世界の四大  
文明が代表例だが、日本でも行基、空海  
の「ため池」をはじめ、戦国大名たちも  
治水工法の発達に寄与した。武田信玄の  
甲府盆地、上杉謙信の新潟平野などだ。  
すべて国力増大、農業生産力の増大が目  
的だった。徳川三百年の間でも、江戸湾  
に流れ込む「利根川、荒川」への治水対  
策には莫大な投資をした。しかし、治水  
技術が進歩しても「自然の猛威」には太  
刀打ちなど出来ない。二十年を費やした

(昭和五年完成)「荒川放水路」は昭  
和二十二年のカスリン台風、翌年のア  
イオン台風によって無と化した。その  
後も利根川に八個のダム群など「東京  
外部方水路(立坑)」を作ったが、一  
九五九年の伊勢湾台風で評価に疑問符  
が付けられる。一九六一年に「災害対  
策基本法」が成立して計画的な治水対  
策が始まった。石狩川を含む現在の河  
川(日本全体)を形作った。海外でも  
「水害との戦い」は熾烈だ。海抜ゼロ  
メートルの土地がほとんどのオランダ  
は風車を使った「干拓」をはじめ、大  
堤防による干拓、アブスロイトテック  
も一九五三年、高潮洪水の洗礼。世界  
最大の動く構造物「マエスラントス水  
門で「デルタ」を制御しつつある。要  
は「根っこで貯める」。今後の気候変  
動や土砂動態の変化を見据えたバラ  
ンがある「土砂管理」の確立が急務だ。

## 「湿原の保護」=辻井達一氏の遺志 石狩川フォーラム報告

(第十三回 一月三十一日)  
道央の石狩低地帯で、日本海側の湿原群  
では日本最大のボツグ(ミズゴケが優占)  
が発達したが、現在、美唄湿原のような断  
片化したものになっている。太平洋側では  
フェン(スゲが優占)が主流。北海道は霧  
と雪の影響が大きい。ミズゴケの成長場所  
である「ハンモック」の調査を各地で行い

### 北の湿原をはぐくむ霧と雪

ある程度、解明できた。ハンモックの高さ  
は日本海側より太平洋東部が高く、ミズゴ  
ケの生産性は日本海側の方が勝っている。  
霧は水分供給より夏季の蒸発散の抑制に効  
果があり、雪圧による生命力の向上効果も  
無視出来ない。黒松内・歌才湿原での実験  
は雑草のトリミングと雪圧除去。結果は自  
然のままが枯死もなく、生産量も高い。ミ  
ズゴケは根や気孔がない。だから、他の植  
物の陰で蒸発散を抑制している。「霧と雪

をかけない「受動的管理」が良い。道内  
の湿原の多様性を維持しつつ、保全・再  
生する必要がある。国をはじめ行政、学  
民協働の事業に。夕張川泥炭地の再生と  
「遊水池」群を幌向湿原再生の拠点に据  
え、将来的に残すデザインを描きたい。

### 矢部 和夫 氏



昭和52年3月 茨城大学農学部卒業  
昭和54年3月 千葉大学理学研究科  
修了(理学修士)  
昭和60年4月 道立高等学校教諭  
昭和63年3月 北海道大学環境科学  
研究科博士後期修了(学術博士)  
平成 8年4月 札幌市立高等専門  
学校環境デザイン学科講師  
平成11年4月 同校助教授  
平成18年4月 札幌市立大学  
デザイン学部助教授  
平成19年4月 同校教授

動の支援事業を目指す。フットパスで  
は「お碗の中」のコースに加え、ロン  
グトレイル(札幌、南幌四十キロ、千  
歳、南幌六十キロ、赤平、南幌八十キ  
ロ)を開設。さらに四川の堤防を一周  
する「仮称・南幌山手線四十三キロ」  
を展望する。これが完成すると夏季は  
マラソンやサイクリング、冬期はクロ  
クロスカントリーなど楽しめる。故・  
辻井氏が提唱された「ワイズユース」  
を実践する「ほろむい七草」の再生・  
保全は、近隣の石狩川流域地帯で七草  
全種の存在を確認した。北欧で珍重さ  
れる「ホロムイイチゴ」生産に必須の  
「ミズゴケ」生産実験にも着手、越冬  
後の増産を目指す。エコ田んぼも今年  
は「親子の農業体験」を主眼に推進す  
る。当法人は「つなぐ」役目を担う。  
地元と他市町村、農村と都市、専門家  
と素人、生産者と消費者。実際に、ぐ  
るくつと一周して見ませんか？

### 河川環境と地域の暮らしの関わり、現場からの報告

### 濱田 暁生 氏

NPO法人ふらっと南幌代表理事



昭和41年3月 北海道大学工学部  
建築工学科卒業  
昭和43年3月 北海道大学大学院  
工学研究科建築計画修士課程修了  
昭和43年4月 東海大学札幌校舎  
工学部建築学科講師  
昭和45年10月~61年3月  
同非常勤講師  
昭和45年10月 建築設計事務所  
(株)アトリエ プンク設立  
同社取締役企画調査部長  
平成元年 (株)シー・アイ・エス  
計画研究所設立 同社社長  
平成16年11月 同社代表取締役会長

(第十四回 二月二十八日)  
石狩低地帯に位置する南幌町を中心に  
活動する、NPOのふらっと南幌です。  
平成十二年から始まった「地域の宝物」  
を探す活動は先人達の開拓の歴史を再認  
するとともに、より実践的活動にしよう  
と平成二十一年に法人化。月例フットパ  
スをはじめ、「ほろむい七草」の再生・  
保全やオーナー制のエコ田んぼ事業等に  
取り組んでいる。札幌に近く、観光の玄  
関口の千歳空港からのアクセスなど立地  
条件に恵まれ、どれも順調。四川に囲ま  
れた町がゆえに、「農都共生」を基本に  
交流型・体験型観光事業や文化・芸術活

